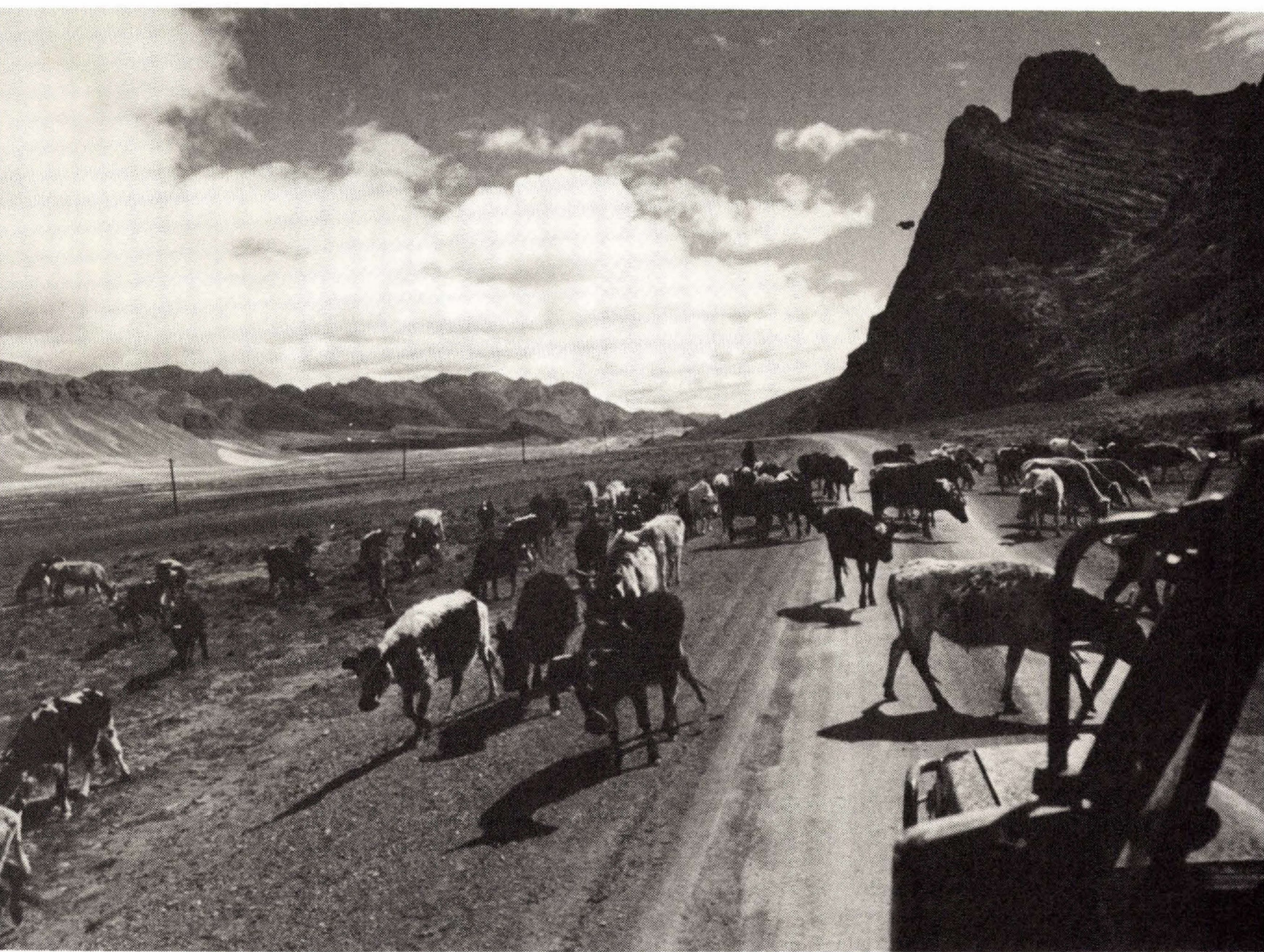


# 針葉樹会報

1988.3. 第71号

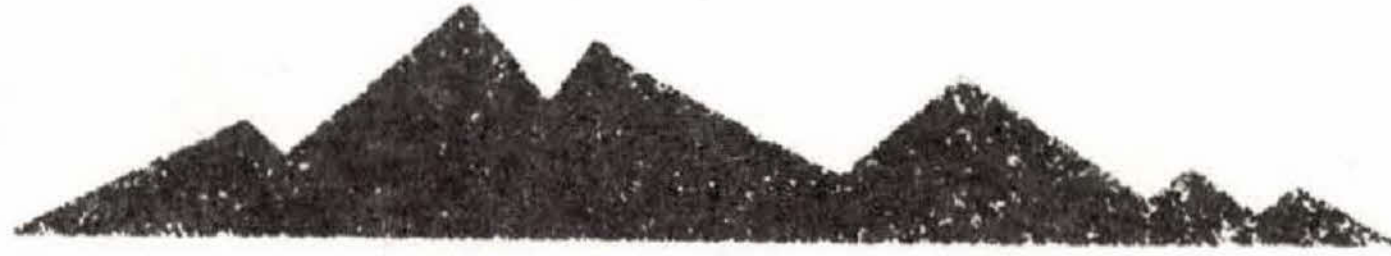


表紙写真説明

チベット西部の高原を行く

(撮影・大慶順一郎氏)

<p>発行日 1988年3月1日</p> <p>発行所 針葉樹会</p> <p>印刷所 篠田印刷</p>	<p>針葉樹会報</p> <p>第71号</p>	<p>編集人 〒167 杉並区南荻窪 3-29-23</p> <p>引地 真</p>
--	--------------------------	--



目次	
ひとのいない山……………望月 達夫……………2	
お正月の山……………倉知 敬……………5	
釣りと大雨……………中西 茂……………12	
チヨ・オユ―登山取材の旅 大慶順一郎……………17	
会務連絡……………21	
編集後記……………21	

# ひとのいない山



望月 達夫

おなじ登るなら、まだ自分の知らない山に登ってみたいと思つて、三十数年登り続けてきた。その結果、あまり人の登らないような山にも随分登つたが、そういう山はだいたい路があつたりなかつたり、あつてもほんの踏跡で藪に蔽われていたりする場合が多いが、またそれだけに静寂な点では抜群であつた。そんな山はどうだろうか、少し拾いだしてみた。但し、ここに挙げた四山は、かなり路がよい方である。

○烏帽子ヶ岳 二一九四米 五万「飯田」

山名辞典で烏帽子と名のつく山を数えると七十を超えるので、その多いことに驚くのだ

が、そのうち二千米をこえるのは七座ぐらいである。ここに挙げたのは中央アルプスの南部、念丈岳から東派して南東へ低下する支脈上の一峰だが、山頂付近はワイルドな感じの岩場を形成しているので、高度のわりには気分のよい山である。

初めてこの山に惹かれたのは、昭和四十七年一月、飯田市の東側の鬼面山（一八八九米）に登つた折、山麓喬木村から望んだ山姿がいかによかつたことによる。

登路は飯田線の上片桐が起点、駅から片桐の集落を経て鳩打峠（△一一七四米のすぐ北）

までは林道が通じていて車が使えるが、私の行った時分（昭和六十年八月十一日）には、

片桐にタクシーがなく、やむなく歩いたので駅から峠まで二時間ぐらいかかった。途中に秋葉神社がある。峠から小八郎岳（一四六八米）へは急登で、山頂直下にまき道もあるが、頂上を経由しても時間はそう変らない。山頂には四等三角点と「片桐小八郎之霊」とほつた石碑があり、展望にすぐれている。峠から約一時間。

一旦下つて短い笹の生えた平凡な尾根を緩登する。カラマツの植林帯だ。一時間半でシラハゲ沢源頭の第一のナギの上端に達する。そこから四十分で白クモナギと標示のある巨大な第二のナギの上端に達した。ここもシラハゲ沢最奥のナギで標高は約一九〇〇米。山頂まで45〜60分と書いてあつた（私は80分かかっている）。その少し手前で飯島町と松川町の町界尾根に達するが、当時はそこに赤白の測量ポールがたち、それ迄北進していた尾根が、そこではっきり西折する。白クモナギは上縁すれすれに通過する処があるので注意が必要だ。

ここを過ぎると山稜は少し岩をまじえた素晴らしい針葉樹の原生林帯となる。かなりの

急登で処々に小さな標識もあるが、下りの場合は踏跡をはずし易い。やがて山頂の岩峰が見えてくる。私が登ったときは丁度その上にカモシカが現われた。その岩峰の左手のつけねに出、針金をつたって急斜面を攀じ、次の岩峰の右をまいて岩層の散乱した斜面を上ると、そこが烏帽子ヶ岳の山頂だった。二等三角点の標石はかなり露出していた。私は、出発から途中休みをいれて七時間四十分だったが、元気な人なら一時間は短縮できよう。また峠まで車を使えばもっと早く着ける。

○雨乞岳 二〇三七米 五万「市野瀬」

「市野瀬」図幅最北東端にある雨乞岳も、あまり人が登らぬようだ。昭和六十年五月十一日午後遅く小淵沢からタクシーで山麓、白州町鳥原の石尊神社まで行き、その前でツェルトで泊る。十二日は快晴、軽装で六時発、僅か南へ行った処に雨乞岳の標識があり、そこから登山道に入る。路はかなり幅があるものの、三十分位は松の植林中で倒木がやたらと路をふさぎ歩きにくかった。

約二時間も登ると甲斐駒の額が樹林の切れ

間から見えてくる。更に四十五分で「保安林」のオレンジ色の標識を見る。ホクギの平（△一六〇〇米）の近くである。ナギの上縁を過ぎると間もなく尾根の南側の伐採地に出て、素晴らしい展望に恵まれる。大岩山のうしろから甲斐駒、その左に鳳凰、その左下方に日向山と雁磧の白いガレ、上方に富士山。駒の右へ鋸岳の岩峰、この景観は五月の晴天なら息をのむほどである。目的の雨乞岳とその左下方の水晶薙もよく見える。

ここから先は一個所原生林が残っていたが、伐採されて身の丈より少し大きいカラマツの植林と変っていた。ナガレコンバと言われるなだらかな峰をまき、そこから最後の登りとなる。手前の鞍部から一時間の苦しい登りで三等三角点のある山頂に達した。西と北にはコメツガなどの原生林がこの山を守るかの如く残り、東と南だけが展望を与えてくれる。私はゆっくり登ったが、途中の休みもいれて五時間半位だった。

山村正光君は「車窓の山旅・中央線から見える山」でこの山を取扱っているが、彼が登ったのはこのルートではない。

○経ヶ岳 二二九六米 五万「伊那」

木曾山脈の北部に古くから開かれている権兵衛峠の北にある山、展望にすぐれていることは、その位置からいって当然であろう。この山は地図上で見たよりも時間がかかるようだ。伊那市の北西にある集落、羽広が登山口。仲仙寺は一般に羽広観音の名で知られた古刹、そこから登山路がある。仲仙寺まで伊那駅からタクシーが使える。私が登ったのは昭和五十五年九月下旬、お花畑と記された五合目（四合目ともあり）まで約二時間、そこから登りが顕著になり北側には見事な原生林が残っている。蔵鹿ノ頭（一九一五米）まで約一時間、南ア、木曾駒方面の眺望がよくなる。尾根を上下して二一五〇米の少し岩のある峰まで約一時間、一旦下って笹の深い処をわけて更に三十分も行くと前岳（二二二〇米）に辿りつく。黒沢山と分岐する峰だが、ややとがっていて小さな岩の重なった上に古い碑石が二つ、南面しておかれている。左の石の中央には「経岳大権現」、左側に「慈覚大師 望月伊左エ門」、右側に「奥院□□跡□□」とあった。右

の石には中央に仏像をほり、左側に「羽広村」、右側に年号「□□十八年」とかすかに読めた。ここが九合目である。

少し下ると、また笹の濃い尾根を行くようになり、僅かな突起を越えるといよいよ最後の登りである。マツムシソウ、リンドウの青い色が美しかった。笹から野芝の斜面を過ぎると黒木の僅かに残っている間を登ってゆくのだが、実に気持ちのよい処だ。山頂には伊弉諾尊・伊弉冉尊を祀った木の祠、古い碑石が三四基、二等三角点標石があった。私は羽広から休みもいれて五時間半かかった。

なお、山頂の少し手前に北方、横川溪——大滝沢を経由する路が認められた。林道がかなり奥まで入っているから、車が使えらるなら登るのにらかな筈だが、車道の現状については詳かにしない。また経ヶ岳の南尾根を北沢山（△一九六九米）を経て権兵衛峠へ至るルートは藪がひどいときいた。現状はどうだろうか。

### ○霞沢岳 二六四六米 五万「上高地」

学生時代、三本槍まで登ったことがある。

『針葉樹』第七号によると昭和八年七月二十一日で、堀岡清さんリーダーのもとに斉藤正治（現黒田）、鷹野雄一、遠藤竹雄、杉浦亮君との計六名で八右衛門沢左俣（近頃は三本槍沢と書いてあるものもある）を登った簡単な記録がある。この時分は目標は三本槍で、霞沢の山頂には特に惹かれなかったから誰も登らなかった。そこへ行ってみようと思ったのは十年位前からだろう。

昭和六十年八月十七日、上高地側から久々に徳本峠に登って一泊。翌日、峠からわり合よい路を辿って四時間二十分で山頂に達した。峠からちよっと上高地側に下った処に道標があり、途中にも処々に標識がある。一時間でジャンクションピーク（二四二八米峰）に出ると、カニコウモリの白花が咲いていた。南西には鉢盛山（△二四四六米、この山もいい山で簡単に登れる）がよく見えた。路は樹林帯をゆるく下る。湿原植物の見られる小さな湿地がある。約百二、三十米下って霞沢本流右俣のツメに当たるコルに出る。北に明神、前穂を望見し得る。次に小さなコブを越えたとまたコルに出る。霞沢右俣の源頭は急峻な

お花畑でマルバダケブキ、ウサギギク、サラシナショウマ、ハクサンフウロが咲きみだれていた。前のコルがこのコルかが、曾て小島烏水が初めて上高地に行くとき越えた処で、先年JACの山崎安治、近藤信行両君が実地踏査をして、それを確認している。近藤君が霞沢乗越と称した処だ。

更に四十米程の小峰を越えると、霞沢岳北峰への急登が始まる。標高差二百数十米の登りは、かなり急峻なので仲々苦しい。ようやく達した岩峰にはK1の標識がたち、六百山へ続く岩稜がそこから分かれていた。トウヤクリンドウの咲いている尾根を伝って一つの突起を越えた次のピークが主峰で、二等三角点がかかれていた。さえぎるものは何もないから眺望は全くすぐれている。

若い人なら下りは八右衛門沢をとるのも、六百山を経由して下るのもいい。だが年配者はおとなしく徳本峠から上高地へ下った。この山にもカモシカが多く、帰途六百山の尾根に悠々ねそべっている一頭を見かけた。

一九八七年八月

# お正月の山



倉知 敬

一九八八年元旦。雲一つない快晴である。

ぼくら四人——中島寛、金子晴彦、佐藤活朗、それにぼく——は、早朝坂巻温泉を後に上高地に向った。岳沢に入って幕営し、次の日には奥穂南稜を登ろうというのである。

大正池の方へ道を右に曲ると、お馴染みの穂高連峰がパツと目にとびこむ。異常に雪少なく、まるで六月の山といった風情だ。もともと今年は暖冬だから正月三カ日だけでも南稜は登れるのではないか、と違ってやって来たのであるが、その黒々とした岳沢側の岩場を見ては、拍子抜けといったところだった。

その日は、終日おだやかな小春日和の中、のんびりと岳沢まで登り、満月に光る山肌を見てから眠りについた。ところが、夜半から天気は急変、サラサラとテントを打つ雪の音

が夜明け前にはかなりの勢いとなっていた。

とにかく、入山に一日、登攀に一日、下山に一日という、休暇の制約のために無理は百も承知の、いわばのるかそるかの日程だったから、始めから悪天候の中で取付くという訳にもいかず、皆あっさりあきらめの心境と相成り、明るくなるまで寝なおすことにした。そうになると、もうその日に出来ることと云ったら、夏道を伝って前穂へ、登れるところまで登ることしかなく、ボソボソと朝食をとってから、幸い割合視界のきく岳沢の谷底を、迷うことなくぼくらは重太郎新道へ向けて登り始めた。

何しろいくらも雪が積っている訳ではないので、かなり速いペースでひたすら急登を続ける内、ガスも濃くなり、冷い風も吹いて、

高度が上ると共に冬山のおもむきとなってきた。傾斜のきつい雪面をつめ、重なるように岩の突き出た斜面を、時折現われるペンキの導標に導かれて上へ上へと登っていくと、まもなく頂上に着いた。何も見えず、前穂高岳と書いた板が足元にのぞいているだけの頂上であつたが、久し振りに穂高の山頂に立った気分は悪くなかった。

とにかく、三千米の冬山に登れる体力がまだあることがわかつた。南稜はまた来年の正月に来ることとしよう。齡はとつてもいつもついていくのが精一杯な程元気なあの三人は、多分また付き合ってくれらるだろう。そんなことを思いながら、気の抜けたまま来た道を下った。

翌三日も重苦しい黒雲が空をおおって、山

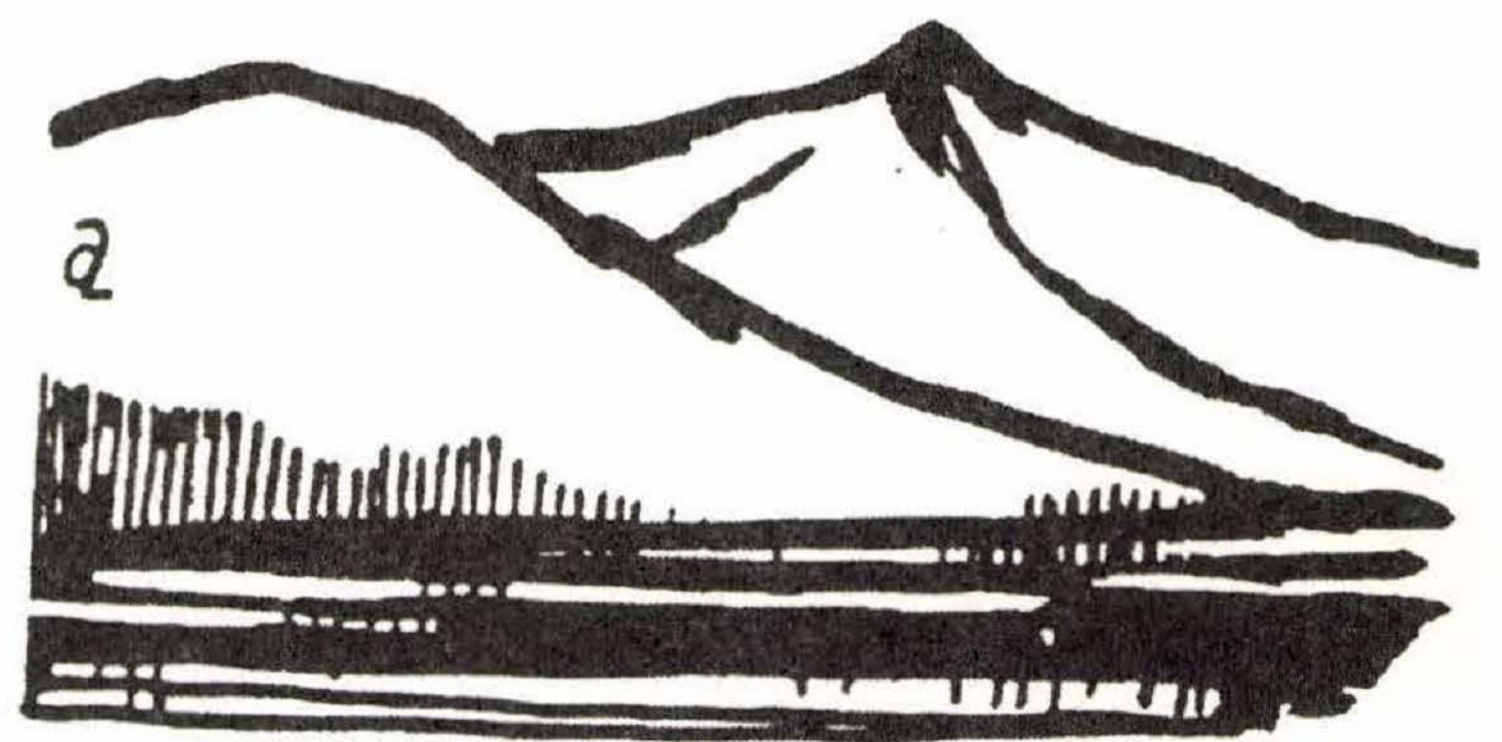
は姿を見せなかった。早朝テントを撤収し、走るように山を下った。岳沢では殆ど人に合わなかったが、上高地迄来ると下山の人波に洗われるような気分で、踏み固められて凍った道に足をとられつつ、坂巻温泉へと駆け降り、露天風呂で汗を流して、今年の正月の山が終った。

昔から、卒業して間もない若手の会員が参加して正月に山に入る、いわばOB冬山合宿が、脈絡として続けられて来た。ぼくらが卒業した直後の頃は、参加者が十人位になるような年もあり、登山の対象も北岳バットレストか穂高のバリエーション・ルートとか、まあ本格的な登攀がなされていた。ぼくも卒業後数年は必ずそれに参加し、山岳部時代の名残りの登山を楽しんで来たが、腰を痛めたりトレーニング不足だったりしたのを口実にして、あえて厳冬のきびしさに対面しなければならなくなるようにする突っぱりは、もう充分やったから願ひ下げにすることにし、冬山はある年からきっぱり止めてしまった。ぼくが止めた後ももちろん、正月が来ると

誰かが必ず冬山に入り、帰ってくると今年の山はどうだった、などという話を聞かせてくれたものだが、大して感興も呼ばず聞き流していた。

ところが、もうすぐ四十台になってしまうという年頃になって、やや事情が変わって来た。このままだともう冬の山を見ることもなく死んでしまうことになるな、以前のようにはいかなくとも今からでも登れるかも知れぬ、登れる内に登っておこう、という気になって来たのである。

そして、それから十年、今年の穂高まで毎年欠かさず、お正月は三千米級の冬山に登ることに精を出して来た。年によっては、無理に日程の都合をつけてとび出して来たり、仲間を探すのに苦労したり、また天気が悪かったり、いつも余裕のなかった登山の中味は大したものではなかったが、ともかく年毎に年齢のへだたりが広がるパートナーに引きずられて、精一ぱい登った。その間、ある年はいくつかに分かれたパーティの一つだったりしたが、参加した山行はその時々若手針葉樹会員の最も元気な連中が加わったものであり、



それは昔からのOB冬山合宿の伝統を引き継ぐものだった、などと勝手に自負している。

その十年の正月山行の記録は、いくつかは既に針葉樹会報に誰かが書いているが、何も書かれていないものもある。今年の岳沢で、今度の山行記はお前が書けと他の三人に頼まれたので、そのついでに自分にとって十年という丁度よい区切りでもあるこの機会に、まとめて以下に十年分の冬山行について簡単に紹介させてもらおうことにした次第である。



へ1、一九七九年・南岳西尾根より

槍ヶ岳及び千石尾根から西穂高岳

会報第五四号に前神直樹君の寄稿「正月の槍ヶ岳——南岳西尾根から」あり。

当時、若手会員のリーダー的存在だった前神、藤本両君から、北鎌尾根へ行かないかと誘われ、先に述べた心境になっていたところだったので意を決したが、北鎌は一九六五年正月OB合宿で登っており（会報十号「冬の北鎌尾根」——筆者名記載ないが小生の寄稿）、復活最初の山としてはきびしすぎるので、前神君と相談して南岳西尾根にした。久しぶりの冬山で不安だったが、正月の山ではたいがい都合よいことに他パーティの踏跡、フィックス等が使え、キーポイントとなった西尾根下部の急峻な岩壁帯もフィックス頼りに簡単に登り切り、槍平付近より槍ヶ岳往復を一日でやってしまった。思いつめて出掛けに来た割にはあっさり登れてしまい、拍子抜けの体で物足らず、余った日程で西穂もかせいでしまった。初めて同行した近藤泰君が元氣一杯でリードしてくれたのが、印象的であ

った。

へ2、一九八〇年・五竜岳—白馬岳縦走

会報五六号に、小生寄稿の「冬山縦走奮闘記—遠見尾根から樽池へ」あり。

へ3、一九八一年・鋸岳

同行者・中島寛、金子晴彦、加藤博行、兵藤元史、松田重明、引地真。

十二月三十一日、早朝新宿を発ち、富士見より入山、釜無川林道終点にある飯場小屋泊。一月一日、暗い内に出発、横岳峠へ向うも、道間違え横岳に登ってしまった。快晴の下鋸尾根をたどり、午後一時角兵衛のコル到着。残りの時間で、第一、第二高点を抜け幕営可能の中ノ川乗越まで行くのは無理と考え、コル下で幕営した。

二日、一転風雪となり、停滞。

三日、曇、強風。前日腰痛の再発したばかりは、休暇のない金子と角兵衛沢を下る。残った者は第一高点まで登ったところで、引地が調子悪く、中島、松田と共に、遅れてやはり角兵衛沢經由下山した。加藤、兵藤の二人は、

風雪の中ノ川乗越までたどり、態穴沢右俣を下った。

へ4、一九八二年・悪沢岳

同行者・前神直樹、佐藤活朗、小林修。

十二月三十日、車で新倉まで行き旅館に泊る。

三十一日、田代発電所まで車で行き、九時出発、転付峠の登りにかかる頃から雪が降り出したが、積雪殆どなく、十二時半峠に到着、一気に二軒小屋へ下った。午後になって晴れ出した。

一月一日、快晴。七時十分小屋出発、凍った夏道をひたすら登る。マンボウ沢の頭付近まで登ると、やっと積雪が見られ、心配していた幕営用の水の確保が可能となった。重荷の急登に疲れはて、十一時、方針を変更してそこで幕営し（二六〇〇米付近）、その日の内に頂上往復を試みることにした

十一時四十五分テントを出発。千枚岳の登りにかかると、所々雪の吹きだまりもあったが、殆ど積雪がない。午後一時、千枚岳にたどりつき、どうやら明るい内に頂上に立つメ



### 〈5、一九八三年・黒部五郎南尾根〉

会報六三号に、佐藤活朗君寄稿の「黒部五郎南尾根」あり。

### 〈6、一九八四年・聖岳〉

同行者・前神直樹、佐藤活朗、柿原和夫。

十二月三十日、午後車で出発、畑薙ダムを越えても積雪なく、どんどん車は林道を走って、とうとう聖沢橋まで入ってしまった。午後九時、車の横に幕営。

ドが立って、急にのんびりした気分になった。しかし、その先の岩稜も結構長く、更になんばりを要したが、三時頂上に到達した。見渡す限りの快晴で遠くまで良く見える。小林君が持参のタコを上げると、巻き込むように吹く風のせいで、すぐ落ちてしまった。何度やっても同じである。帰りは日暮れと競争で下り、四時五十分、うす暗がりの中でテントに帰り着いた。ついにアイゼンは使用せずじまいだった。

二日、ゆっくり下山。転付峠で再び熱心なタコアゲ。何しに山へ来たのだろう。その日は新倉の少し先の大滝温泉に泊り、のんびりお正月らしい気分を味わった。

一月一日、快晴。午前八時出発、ほぼ夏道伝いに、ゆっくり登る。三時間で登頂。風もなく、視界は限りなし。駿河湾もよく見えた。

二日、快晴。四時間程で聖沢橋迄下り、あとは車でその日の内に帰京した。

短期間で確実にどこかの頂上を踏もうと考えると、どうしても雪の少ない南アルプスを選んでしまうが、あまり少なくとも困るものである。

### 〈7、一九八五年・鋸岳より甲斐駒ヶ岳〉

同行者・谷口隼人、鮎沢政文（二人共山岳部部員）。

どこかへ行かないか、と誰を誘っても皆都合悪いという。思いあぐねていたところへ、それを伝え聞いた学生（二年生）二君が、鋸岳へ行きましようかと誘ってくれた。山岳部では、誰かOBがついていくなら行ってよい、ということになっているらしい。渡りに舟と、四年前の雪辱をはたす機会にとびのった。しかし、ぼくのような定年後再就職みたいなのが行けば安全というのか。いや、何でもよい、せっかくのチャンスではないか。

三十一日、快晴。当初の予定では東尾根を登るつもりであったが、かなり上部まで積雪がないもようのため、ヤブコギに終始しそうな気配なので取りやめ、夏道伝いに登ることにした。午前九時出発。聖沢吊橋を過ぎ、急登となったから、聖沢側を捲く道筋にはかなり積雪があったが、トレースがしっかりついており、行程ははかどった。長い道のりに疲れはてた頃、聖平小屋に到着。午後四時。快晴、寡雪はいいが、非常に寒気がきびしい。幸い開いている小屋の中に入り、その中にテントを張ったが、まだ寒い。

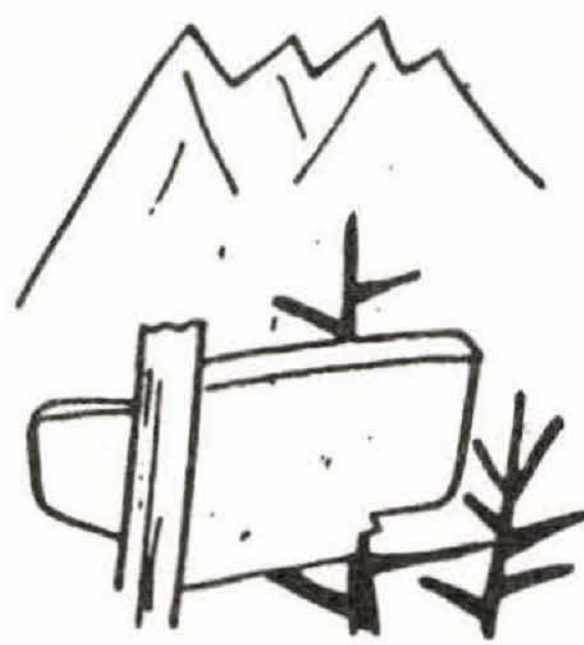
一月一日、快晴。前夜発の夜行で早朝富士見着。タクシーは林道はるか手前の釜無川採石場迄しか入らないため、二時間程、車道を歩かされた上、前回の時泊った飯場小屋を通り過ぎ、日陰で寒い谷底を登る。今度はどうやら道を間違えず、午後一時横岳峠着。更に一時間程尾根をたどり、山岳部では二時になったら行動終了です、と言われて幕営。

二日、快晴。午前六時四十分出発。実に規律正しい生活である。八時半、三角点ピークに立つと、強風が迎えてくれ、体がふらつく程だった。しっかり踏み固められている稜線の道を、かなり速いペースでどんどんとぼし、十時第一高点。小ギヤップはボルト支点の懸垂下降、二君共手慣れたもので、自分の二年の時より余程しっかりしていると感心した。大ギヤップでは荷物をつり下ろしてから懸垂、ザイルさばきなど、すべてスムーズに運ばれ、心配もない。

第二高点は信州側を捲く。バテ気味のぼくを置いて、二人は頂上を踏んで来た。あとはたんたんと、十二時半中ノ川乗越、午後二時半六合目石室。中にテントを張る。

三日、風雪。視界一〇〇米程あり、思い切って六時半出発。横なぐりの強風だが、時々止むので助かる。いつまでも岩尾根が続くので果てしなく感じる。重荷の谷口君がアイゼンをガリガリ鳴らして岩場を登るのを見て、よく落ちないものだと感心しつつ、あとを追う。

ある岩角を越えたら、突然頂上に出た。八時四十五分。視界ゼロだが、風が止んで助かった。駒津峰へ向う稜線を下っていくと、人が多くなり、天気も好転、とたんに散歩気分になった。どんどん下り、午後一時北沢峠、四時戸台に到着。バス待ちの食堂でガツガツと食べる二人を見ながら、無事でよかったと思った。



#### 〈8、一九八六年・赤石岳〉

同行者・金子晴彦、引地真、柿原和夫。

十二月二十九日、二年前の聖岳の時のように、車でスイスイ樺島まで入れるにちがいないと、タカをくくって畑薙までやって来たばかりには、道に渡してある鎖が信じられなかった。しぶとく番人と交渉して、その日の内に車を戻せば入ってよいという所まで成功、落石だらけの林道を強引に突っ走って樺島まで歩かずに到着した。但し、金子、柿原の二人は気の毒にも、正直に車を畑薙に回送した後、暗くなった林道を徒歩二時間の苦闘をした。

三十日、曇のち雪。午前七時半、樺島出発、東尾根を登る。登る程に積雪が増えるが、赤石小屋付近でヒザ程度だった。午後一時半、小屋付近に幕営、到着寸前から雪となった。

三十一日、晴。頂上往復のつもりで午前九時出発。悪天候を予想していたので出遅れてしまった。その名のとおりに富士山の景観誠に素晴らしい富士見平を過ぎ、東尾根上部の急登する稜線に出ると、岩場につづく鞍部で先

行パーティ多数が順番待ちをしている。全部がその岩場を通過するのは、日が暮れる頃と思われる程遅々たる動きである。

これでは仕方ないので、東尾根から中尾根方面へ、谷を横断してしまうことにして、鞍部へ伸び上って来ている急なせまいルンゼを下る。雪崩が危いのになんかとしていいんですか、という声が順番待ちの人垣からかかったが、もう金子君あたりははるか下まで降りてしまっているし、雪崩れるという程深い雪でもない。下ってみれば、案ずる程のこともなく、アツという間に谷底に着いた。底を横断して、対岸の中尾根へ登り出したら、北側のその斜面は雪固く、正におあつらえ向きの登行ルートであった。登る程に、赤石東面の岩壁が眼前にせまって来て、南アルプスにしては珍しく、アルペンのな雰囲気となった。こうして非常に気分よく、アイゼンをきしらせ、巾広い中尾根の好き勝手なところをたどり、主稜線にとび出た。流石にそこは強風の世界で、横を向きながらヨタヨタと歩き、午後一時半、頂上に立った。

帰路もほぼ、往路どおり谷伝いとしたが、

その頃になっても、東尾根上には順番待ちの人影が見えた。中尾根の北斜面には、往きには無かった細かい亀裂が雪面の所々を横切っていて、気持ち悪かったが、雪板雪崩が起きていたら東尾根の観客を喜ばせたことだろう。ともかく、悪運強く、四時半テントに帰り着いた。

一月一日、午前九時二十分テントを撤収し、下山。樫島からは、長い長い林道歩きをして午後四時半、畑薙に戻った。その日は井川の大西屋旅館に投宿、シシなべをつつくなど、楽しい正月と相成った。

#### 9、一九八七年・加賀白山

同行者・中島寛、有賀盈、柿原和夫。

冬山は何事もたいへんだが、特に山の選定が大変である。何しろ、参加者の顔ぶれ、それぞれの休暇の都合が、たいがい直前まではつきりしない。皆めんどくさくなって最後にはどこでもいいと、ひとまかせにしてしまうのである。

そうして決まったのが、この年は白山であった。別に暮れの早目に出発する日どりの、

金子君らの餓鬼岳の計画もあった。豪雪地帯にある山に数日の正月休みで登ろうというのは普段であれば非常識であるが、この年はここ数年の暖冬の中でもとびきり暖く、年末が近付いても全国のスキー場には雪がない、という状況で、例年なら出来ないことをやれる事情にあった。この年は、素早く登るために雪の少ない南アルプスでも行こうものなら、無雪期の山にぶつかること必定と思われた。事実、餓鬼岳ですらヤブコギに参って中止したことが、あとで判った。

東京からは地の利の悪い白山は、なかなか訪ねる機会がなく、まして冬山となれば大げさに云えば外国の山へ行くような雰囲気もある。地図、案内書をあれこれ調べて、登攀の面白さ、周りの景色、行程の長さや日程、などを勘案し、釈迦岳経由で尾根伝いに主稜線上御前峰北方にある七倉岳に出る迂回ルートをとることにした。

これだと、ややきつい時間的に間に合う、終始白山主峰群が登る尾根対岸に望める、釈迦岳の尾根はこの辺では尾根の形態が珍しくはっきりしており、やせ尾根状のところもある。

り変化に富むし、むしろラッセルの労も少なからう。といった諸々の計算の結果は、以下のように全く予想外の雨によって甚だ狂ってしまったのであった。

一月一日、雪。前夜発の寝台車で早朝金沢に着き、初詣客と共に北陸鉄道の電車、バスと乗り継いで白山下駅に到着、そこから入れる所までという条件でタクシーを走らせた。チラホラ降っていた雪が、だんだん大つぶになり、車のワダチが残っていた雪道もやがて真白になり、とうとう車が動かなくなった。市ノ瀬の少し手前あたりである。やや早すぎたが誤差の内、普通なら身の丈の積雪が当り前なのだ。しんしんと降る雪の中、ぼくらは林道を進み、やがて釈迦岳尾根へ至る樹林帯の中の登山道を登り出した。まもなくしてワッパをはくことにしたが、雪はヒザ下程度で大したことはない。夕方まで頑張って歩き、ほぼそこからなら頂上往復が可能と思われる高度一七〇〇米付近の所に幕営した。

かなか釈迦前岳の顕著なヤセ尾根にならない。幕営地は思ったより下だったようだ。やっと前岳にたどりついた頃は、その日の内の白山登頂は難しいと思われる時間になっていた。視界は結構遠くまでできき、白山頂上付近も鎧壁越しにうっすらと見える。どうやら高山らしいたたずまいにはなつて来た。前岳より釈迦岳を越え、七倉岳へつながる尾根の分岐点に出たところで、午後一時。一応小康状態の天候だから、無理してその日の内に七倉岳まで位はいけなくてもいいが、明日という日もある。ここは一旦引き返そうということになった。

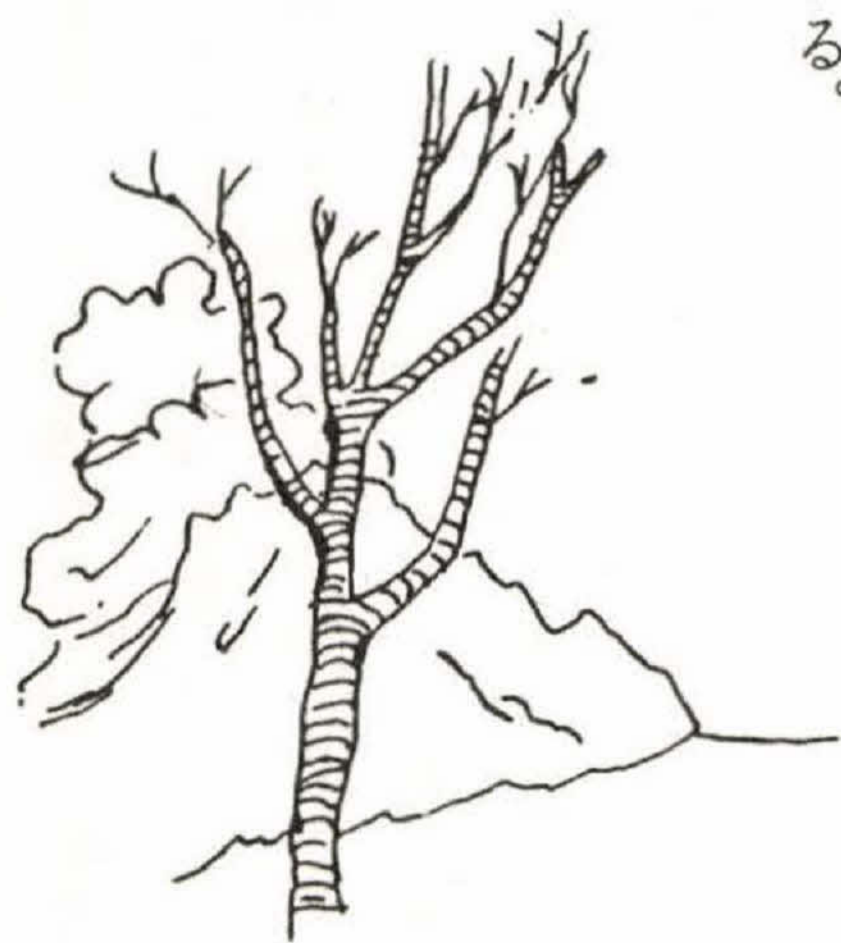
三日、天気予報は悪化の兆しをつげていたが、夜半からテントをゆるがすような大雨となった。これでは、すべてお終いだ。明るくなる頃は小雨もようとはなっていたが、ぐすぐすの雪ではきのうのラッセルは役立たない。もう一日しか余裕のない日程であれば、さつさと下るしか手はなく、テントをたたんで下山する。来た道をトボトボ引き返し、市ノ瀬付近で運良く出会ったジープに白峰村のバス停まで乗せてもらい、村の公衆浴場となつて

いる温泉に入ってひと心地ついたあと、バスで金沢に出た。

〈10、一九八八年・前穂高岳〉

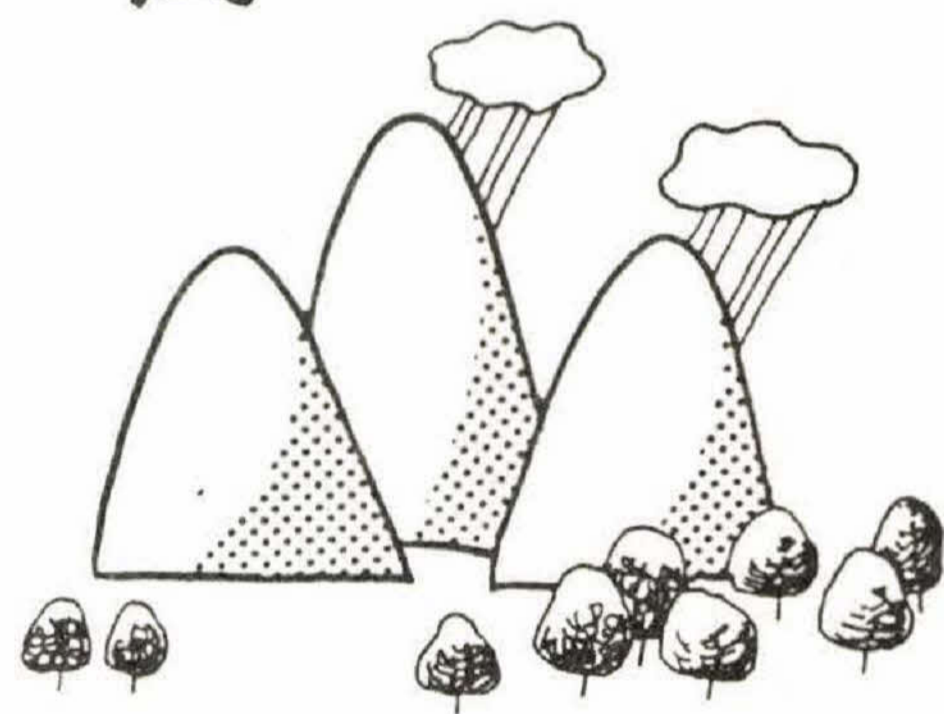
ここで冒頭に戻って頂いて、十年間の正月の山のお話はおわりとなる。振り返って見れば、その間ほとんど極端な悪天や豪雪に見舞われることなく、特に天気の比較的よい南アルプスを選んだこともあって、幸いほぼ思った通りの山に登ることができた。

しかし、それもその時々に応じて、一緒に登ってくれた仲間、それも針葉樹会の仲間がいてくれたお陰である。これから先の一年々々、衰えゆく体力・気力が冬山に通じるかどうか、誘ってくれる仲間、いや誘いに応じてくれる仲間がいる限り、挑戦し続けたいと思っっている。



# 「釣りとお天」

中西 茂



『山登るんは、ひとりではしんどいし、山へ入って、テント張って、しかも退屈せえへん何かないかいなあ』『本読んでもええけれど、それだけじゃ物足りんしなあ。』と昨夏、五日間の休みをとってはみたものの、何をやるか、はっきり決めてなかったため、あれこれ考え込んでしまったのでした。元来、計画性のない、いきあたりばったりのところがある私には、いつもの事なんです、さすがに五日もあると、ボンヤリするには時間がもったいない。ボケた頭が加速度をつけてボケしてしま

『夏休みは、土日は喜んで五日間』こればかり考えながら、車をころがしていると釣り道具屋があった。『アア、これやろ！溪流でもいいし、湖でもいいけど、とにかく人里離れた所で釣りしよう。』ということ、さっそく本屋へ行って本をあさる。釣りをするにもいろんな釣りがある。本当に魚を釣りたい人は、それこそ、あらゆる手段を使うでしょうが、私の場合は、そもそも魚はあんまり好きではない(食べ物の話ですが)。とすれば、スポーツとしてやってみたい。ましてや、ミミズや、ゴカイといった生餌は気持ちが悪くてやる気にならん。(以前やったことがあるけれど、どうも自分には向いていない。)こうなれば一部巷ではやりのルアーフィッシングをやるしかない。てな訳で、本を二、三冊買い込んでさっそくにわか勉強をして、釣り道具を一式そろえ、いざ出発ということになりました。行き場所は、あれこれ考えたあげく、新潟・群馬・福島の県境いの銀山湖。本当は、ブラッ

クバスのいるもうすこし温水性の湖にしたかったけれど、その辺は人家があってテント張るにも気がひけそうなので、今回はあきらめ次回挑戦することにした。この湖は奥只見の雪どけ水を集めたダム湖で、北陸自動車道を一歩、小出インターまで車で飛ばしそのあと山道を三時間あまりもトンネル道をくねくねと曲がりくねりながら、やっと到着できる、なかなかの秘境です。トンネルにしても、ダムを建設する際に作られたもので、その辺にあるトンネルではない。暗い電球がともり、天井からは水がザーザー流れ落ちているようなしろもので、あんなところで、ガス欠でもおこそうもんなら、えらいことになる。ともかく、なかなかおもしろいトンネルでした。

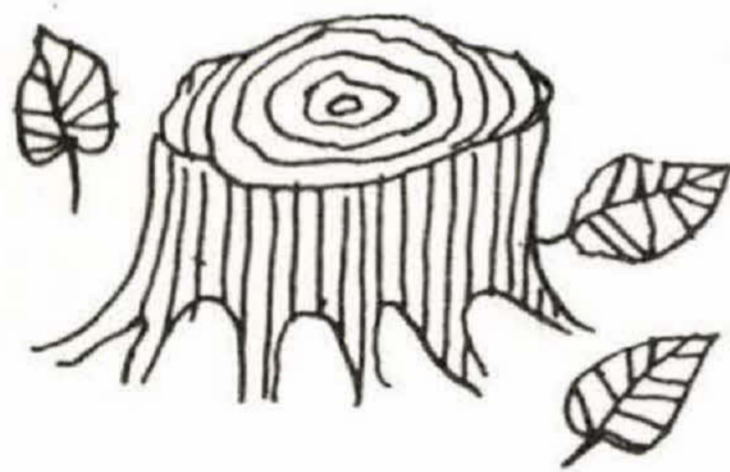
トンネルを終え、ダムサイトに着くと、思わず『日本人はえらい』と感激する光景に出くわした。ダムのそばに、それこそ二百台はOKという大駐車場、レストランがあって、スピーカーは、地元の民謡らしきものをがなりたて、大観光地の様ソウを呈している。これは、あかんと逆もどりして、トンネルの途

中で左折し銀山平へ行く。銀山平より奥只見方向へ、湖ぞいに走る。道は一応舗装してあるものの、山の傾斜を切りくずしたあとがそのまま地膚を出しており、大雨が降ったら、いっばつやなあと思いつつ、テント場を探すが、左は湖、右は急な斜面でなかなかいい場所がない。それでも、三十分以上も細い道を走って、やっと埋めたて地のような場所を見つけた。ここは結構広くて、車なら十台ぐらいもとめられそうなところで、うまい具合に、近くの沢から水がとれる。すでにテントが一張りあって、その住人は釣りに行っているらしい。

今日八月十五日は、まずまずの天気で、湖にうつる夕焼けが美しい。

暗くなって、テントの中でメシを作り始めたが、久し振りの事で、シンメシを作ってしまった『どうしようかいな、ラーメンでも食うか』と考えていたところ、隣のテントの住人が近づいてきて『そちらさん、お一人ですか?』『ハイッ』『それなら、焼肉があまりそうなんで、一緒に食べませんか』『ビールもありますから。』と言ってくれる。これは『地獄

に仏様』てなもんで、さっそく持参した、つげ物とウォッカを持ち、喜びいさんでごちそうになることにした。その人は、新潟市内から来た、四十才前後の静かな人で、たまに一人で釣りに行くらしい。釣りキチは、家族の事も考えず、暇さえあれば、魚と格闘するらしいが、その人は、そんな感じでもなく、なんとなく、人生に疲れた世捨人の雰囲気も多少まじった風で、多くは語らず、落ちついた物腰で、こっちが酒が入って、調子に乗って、あることないこと、しゃべり散らしているのを、じつくりと聞いている。酔って、マッ赤になった顔をふと上に向けると、そこには満天の星があった。久し振りに見た。これが実感。今回の旅の成功は決まった。心のすきまが埋まったような気がしてシュラフにもぐり込む。



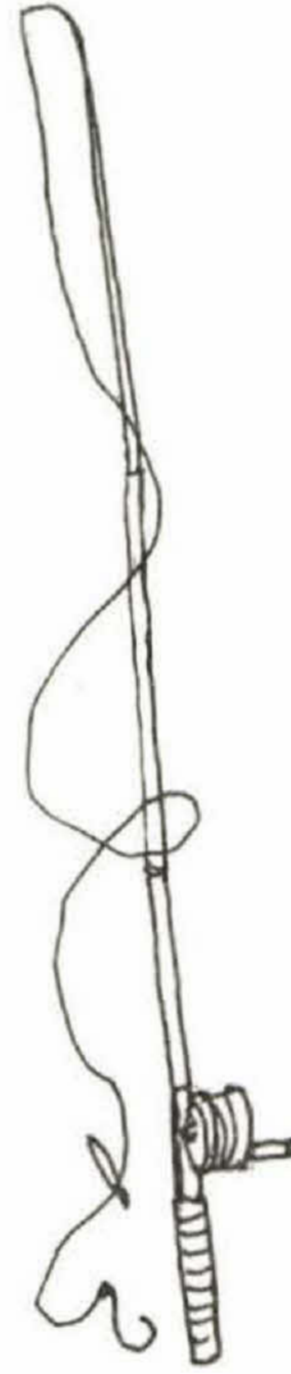
翌日、朝おきると、隣りの人は、もう釣りに行っていない、それでは僕もと、ラーメンを一気に食って、湖の岸边におりる。そこはちょっとした入江になっていて、すでに四、五人が釣っていた。適当な座りごちのいい場所を見つけて、ルアーをつけて、いよいよ始める。ルアーを遠くまで投げるのに、ちょっと練習する必要がある。最初の頃は、ほんの二、三mぐらいのところへ落したりしていたが、ほどなく慣れて、遠くへ飛ばせるようになった。しかし、この釣りは根気がいる。浮き釣りなら、じつと魚が食うのを待てばいいが、いちいち遠くへ飛ばしてから、ルアーを餌のように見せかけながら、リールを巻いていかないといけない。最初の一時間ぐらいは、それでも何度となくくり返してこれをやっていったが、うんともすんとも手ごたえがない。ルアーをとっかえひっかえ、本を読みつつ何度やっても、全く同じ。『ちょっと暑すぎなのかなあ。魚も昼寝してんのとちがうかなあ』なんぞと考えつつ、それでも、緑の山肌と青い空をながめながら、あきもせず同じ動作をくり返していた。『周りを見ても釣れてい

る人もいないようだし、シロウトの俺に釣れる訳がない。』なんぞと考えていると、自然にマブタがとじてきた。『まあ、陽も高くなつたし、この暑さじゃ、どうにもならん。』とそのまま岸边で昼寝に突入。ええ気持ち。『何度やっても、青空の下で、何も考えずに、ボーツと寝るのはええもんや。』

何時間ぐらい寝たろうか。足と首すじが、いやにヒリヒリする。半分ヤケドのようになってしまった。目がさめて、パンを食っていると、昨日のオジさんが、ボートを持ち出し今度は湖に出て釣るらしい。やっぱり釣れないとのことで、何やら無然とした表情でボートをこぎ出し、視界から消えた。こっちも、会社の連中に、最低一匹は釣ると、ミエを切った以上、坊主では帰りづらいで、夕方になって、再度チャレンジすることにしてとりあえず、周りの探索に出かけた。山への道はまるでなし。沢ぞいに行けば入っていけると思い、水場を過ぎて奥へ入っていく。そこに記念碑があった。それは十年ばかり前、遭難した人のレリーフがはめこまれていた。自分も一度は、死にかけたことのある身故、一瞬

厳肅な気分におそわれ思わず黙礼する。

そこから先へはかなり険しいため、あきらめてもどることにする。あとは、本を読んだり、また昼寝をしたりしながら過ごす。夕方の釣りもやめてしまう。根気のない事はなほだしいが、まあええかとかかってに決め込んで、その日一日頭の中をカラッポにしてぐうたらする。



次の日、朝から雨が降っている。これじゃおもしろくないとまた寝る。十二時頃になって、起き出してみると、雨はあがっていたが、およそ夏らしくない天気なので、さてどうしたものかとテントの横でタバコをふかしていると、五十才ぐらいのオジさんが寄ってきた。いかにも地元の人という感じで聞いてみると、福島県の人で、百姓をしておったが、それも子供にまかせてしまい、今は、奥さん（そんな表現は適切でないかもしれない。いわゆるオバちゃんである。）と二人でライトバンに乗って、釣りをしながら、あちこち回っている

らしい。なんでも夜あける前にここに着き、雨がツバをきて三匹も釣ったという。見せてもらったが、おおきいのは、五十cmぐらいもあるヒメマスで、『やっぱりここでも、うまい人にかかれば魚も釣られんのやなあ!!』とひとり感心して、いろいろ釣りについて教えてもらう。それによれば、この辺も昔は、それこそ一m以上もあるイワナがうようよいたそう。釣れるときには、それこそ一mクラスが、二、三時間のうちに十匹以上とれたという。そのオジさんは、純朴そうな人で、まんざら嘘でもなさそうである。もっともその頃は、車の入れる道もなく、山にはマムシがうようよしていて、それこそ命がけだったらしい。やっぱり、それくらい苦労しないと大魚にはお目にかかれない。話のひとつひとつ感心しながら聞いていると、夕方また釣るから、よかったらルアーはあきらめて、自分の釣りザオを貸してやるからやってみろといってくる。やっぱり生餌でないと、この辺はダメらしい。魚も賢くなって、ルアーなんぞにだまされない。ましてや、シロウトに釣れることはまずないと、きついことをおっしゃる。



四時頃より、また雨が降り出し、本格的になつてきたんで、霧にただよう湖面を見ながら、なんとはなしに過ごす。こんな雨の中でも、例のオジさんは釣りに行った。オバさんは野草をつみに山の方へ行った。やっぱり地の人は勤勉この上ないなあと感心しながら、そのうしろ姿を見つめる。

夜半、雨の音で目がさめる。時計をみるとちよつと〇時頃。頭がさえるにしたがい、えらいことになっていることに気づき始めた。ものすごい暴風雨で、テントの下には水がたまつてビショビショ。テントは風で飛ばされそうになって、手でおさえてないと、それこそ、中に入ったまま湖にほうり込まれそうである。今はいったい何月なのか全く信じられない。それ以後、ずっとテントを手でおさえながら雨のやむのを待つが、いっこうに弱まりそうにない。こりや土砂くずれで、道が遮断されるやもしれん。そんなことになったら、会社で大きわぎになるかもしれん。無断欠勤はともかく、山へ釣りに行くといったきり、詳しい事はなにも言っていないから。夜中の三時頃になって心細くなり、こんな事を考

えてると、突然隣りに泊っていたオジさんの

車が動き出した。「アアー、いよいよ俺を見捨てていくのか。」といよいよ不安になり始めたところ、方向転換をしてから、また元の場所に止ってライトも消えた。この暴風雨の中走るのは危いと思つたのかどうかは知らないが、ともかく置き去りにされなくてホツとする。

それから朝がくるまでうつらうつらしながら、不安な夜を過ごす。こんなことは、大学二年の剣の冬合宿以来のことだけれど、今の方が一人だし、ずぶぬれなんでもっと心細い。

朝になって少し小降りになった。こんな所に長居は無用とテントをたたんでみると、すでに出発したらしい、オジさんの車もどつてきた。いよいよ道が遮断されたかなと思ひ聞いてみると、僕の事

が心配になって帰ってきたという。なんなら危険な山道だから、温泉まで案内してやるという。こんな親切な人に会つたのは、本当に何年振りだろう。昨晚

車を動かしたのも、生きてるか確かめるためだったという。ちよつと言ひ方が大げさだけれど、ともかくすばらしい。

オジさんに先導され、原生林の中を走って四時間、やっと民家のあるところへ出た。こは、尾瀬の裏側とも言えるところで、この辺まで来ると観光客の車が結構走っている。

それにしても、山登りをしていた頃と同じで、雨男は今も生きていらしい。それも八月のまっさかりに、こんな雨に降られるとはついてない。しかし、こんな目になったお陰で人の親切にもふれることができた。下界におけるからの話題もふえたと喜びながら、木賊温泉の露天風呂にヒリヒリする足首を湯の外に出したまま、のんびりとつかっている。



サメの歯が並んだような氷河。5800m

寄稿

# チョ・オユーー登山取材の旅

大慶 順一郎

昨年夏、カモシカ同人のチョ・オユーー登山隊に同行取材した朝日新聞の大慶順一郎記者から寄稿いただきました。登山の様子は二月十四日テレビ朝日系列で放送されましたので、ご覧になられた方も多いかと思えます。

大慶氏は昭和五十五年一橋大学卒業。在学中一時期、山岳部に籍を置いていました。現在、朝日新聞社会部に勤務しています。

「ヒマラヤへ行ってくれ。今井通子さんの登山隊の取材だ」と電話で突然いわれたのは、朝日新聞襲撃事件の応援に行った阪神支局（西宮市）でのことだった。八月十七日の出発まで一カ月半。東京に戻って、登山隊事務所に通話すると、「靴も服も、サイズが判らないから、とにかく大き目を船積みしておきました」。すっかり準備万端整ったところに、「おじやまします」と飛び込んだ恰好で、「それじゃ、よろしく」と口では明るく言うものの、大丈夫かいな、と内心不安なスタートだった。登山隊は、今井通子さんを隊長に、夫のカモシカスポーツ社長高橋和之さんら六人。中

国・チベット側から、世界で六番目に高いチョ・オユーー（八二〇一メートル）の無酸素登山頂をめざすとともに、高橋さんは、頂上からパラグライダーで飛ぶ、というおまけつき。隊員は、いずれも八千メートル経験者ばかり。同行するテレビ朝日チームは、唯一の社員ディレクターが、早大OBでK2サミッター。カメラマン、助手は、社外の登山専門家という強力布陣。それにひきかえ朝日新聞社は「カネかかるし、お前は写真もうまいから一人で行ってくれ」との上司のお達しで私一人。山といえば、一橋大山岳部半年で退部の輝やかしい経歴だけ。富士山にすら登っていない。「高度順化の訓練しろ」「低圧室に入りたいならオレに頼め」と先輩から声はかかるが、高校野球地方大会の取材やら何やらで結局、社内の階段昇り降りのトレーニングを済ませただけで出発の日を迎えた。

成田では、ビブラム底の短靴に登山シャツの当方にひきかえ、隊長はハイヒール姿。年季の差にあ然としつつ、北京からチベットの首都ラサへ。

飛行機から降り立つと標高三七〇〇メートル

ル。強い日差しと薄い空気。人や物の輪郭がくっきり鮮やかに見える。ホテルに着いて、さっそく高度順化をかねた散歩に。途中、自転車のおっさんと交渉して、彼の自転車を借り街を走る。いっしょうけんめいごとと、スーッと頭が軽くなる。

チベット自治区体育登山公司主催のパーティー、トラックへの登山荷物の積み込みを終え出発。この間、こちらは、ラサの街を取材で動き回ったが、通訳が、日本語を一年勉強しただけ、という人で使いものにならず、病院の取材では、英語のできる医師を捜して案内をこうなど難渋した。

さて、キャラバン隊は、新車の三菱パジェロ六台とトラック三台。パジェロが多いのは、途中までトレッキング客を連れていくため、ここらの商売は今井さん、抜け目がない。お客さんからガイド料、車の使用料がとれる上に、使った車は中国登山協会に売り払う。中国は車の輸入関税が二〇〇%。今井さんにとっても登山協会にとっても、中古車売買はうまみのある商売だ。

チベット高原を一路西へ。取材班は、チヨ

モランマ北方のロンブク谷へも寄り道。ヒマラヤひだを幾重にもまとった、巨大な北壁を間近に眺めた。ちょうど防衛大隊がベースキャンプを設営しており、コーヒーをごちそうしてもらった。

ラサから約八五〇キロ。チヨ・オユー北面のTBCには四日目の深夜に着いた。途中、菜の花畑、ソバ畑が花盛りだった。羊やヤクの群れが草を食べる草原。地のしわ、断層をそのままに見せる山々の斜面。車を止めてカメラを向けるたびに集まってくる遊牧の人と、なかなか楽しかった。中国というだけで、取材の規制とか多いだろうなと思ったが、ほとんどフリーパス。車こそ検問があるが、自転車旅行の若者らは、警察官が小屋で休んでいる間に、知らぬ顔で通り抜けていた。

ヤクに荷物を乗せて、いよいよ山登りが始まった。こちらも、六〇〇ミリの望遠レンズ、カメラなど機材がけっこう重い。氷河から流れ出す川を渡る。ももまでの深さ。水圧が強い。TBCは標高四九五〇メートル。ここからベースキャンプ予定地へは、モレーンの間をジャブラ氷河沿いに南へひたすら登る。標

高差は約七〇〇メートルだ。

初日ということもあり、途中のパルンという広場で一泊した。夜は雪。ヤク追いのテントで、麦こがしや、ヤクチーズなどをごちそうしてもらった。子牛の皮で作ったふいごで、乾かしたヤクのフンの燃料を景気よく燃えさせた。我々はハイピーシートの下で、彼らはテントと、はみだし若者二人が、露天に毛皮のシュラフにくるまって、それぞれ眠った。

九月三日。ベースキャンプ設営。正面に両肩をいからせたようなチヨ・オユーが座る。右手に三角錘の六六〇〇メートル峰、左手に見上げるほどに迫る六四五〇メートル峰。左側一帯に氷河が流れ、その向うに、ネパールへ続くナンパラ峠が平らな平原となって続いている。テントは、モレーンの丘に、三段に建てた。シェルパが、鮮やかな枝で組みあげた石組みの食堂を中心に、エスパーステントが数張り。発電機があり、三つのテントには電球さえ灯る。なかなかの住みごちだった。登山活動開始を前に、シェルパが、安全と成功を祈る儀式をする。半日がかりで捜したお地蔵のような三角の石に白布をかけ、五色

のタルチヨ（経文を書いた旗）を高知の仁淀川にかかるコイのぼりよろしく谷にわたす。バター、酒、コメ、麦粉を山の神に捧げ、長い経文を読む。最後は、献上物を三方にまき、お互いにかけて合っておしまいだ。

さて、ルート工作、荷上げの組み合わせは、第一グループ早川晃生（東洋大OB）、近藤謙司（駒沢大OB）、第二グループ大蔵喜福（ずっとカモシカ）、加藤智二の二組が交替でやることになった。何せ、隊長殿はあくまで隊長であり、夫の高橋隊員は、隊長よりもっと、「偉い」、カモシカ同人代表、社長なのであった。「登山も仕事ですよ」という、あわれな社員隊員たちは、二人のバラサーブのもとで、ひーこら働いていた。

参考のために言っておけば、今井さんが医者であるのは、東京女子医大の非常勤講師という、ほんの小さな肩書きだけで、実際は、全国を講演旅行に飛び回る登山家が仕事なのです。早川、近藤、大蔵の三隊員は、いずれも、今井さんの講演など雑用一般をこなす会社、ル・ベルリーの社員なのです。「ぼくたち、山へ行かないことには仕事にならないので

す。だって、常に話題の人であることで、今井に講演の話が舞い込むのですから」というオハナシだった。

それは、ともかく、登山は始まった。

ルートは、この年の夏、国際隊が登ったり、中国隊が登ったノーマルルート。氷河づたいにチヨ・オユー西面に回り込み、途中から南西稜に取り付く。まず、この稜線上、六二〇〇メートルにC1。つづいて、この稜線から、長駆、北面へ回り、プラトールを抜けて広大な北斜面を登る。C2は六九五〇メートル。斜面を横切り、直登し、C3は七四〇〇メートル。あとは、イエローバンドを抜け上へ上へと頂上へ、というものだった。

第一工作隊の早川組が出発した翌六日、「日帰り」を条件にC1へ向う。高さ三〇メートルほどの、サメの歯を並べたような氷塔のわきを歩く。約二時間で南西稜の取り付きへ。順斜四五―五〇度。高さ百数十メートルのガレ場を抜け、さらに、ゴロゴロ石の上をだらだらいくと、岩の上にC1拡張工事をしていく先発のシェルパたちが見えた。だが、見え

ても、日本の山以上になかなか着かない。雪と岩の分かれ目にC1はあった。テント二張り。ルート工作、荷上げとも、事実上ここが拠点だ。

上部偵察の結果、雪が少なく、ルートに難点もない、とあって第一次アタックは十七日に決った。六人のシェルパが、二十キロの荷を背負って、C1へと荷上げを進める。

この間を利用して、私はTBCへ下り、近くのシシャパンマ登山中のククチカを取材することにした。シシャパンマに登れば、ククチカはメスナーに次ぐ、八千メートル峰十四座全山登頂者となる。下のTBCと無線連絡し、中国人連絡官に向うの日程を聞くと、「大丈夫。今なら登頂後下山して会える」という。急いで下りた。

だが、これは、結局パーになった。連絡官が、勘違いしたためだ。キャベツなどの野菜を背負って、単身BCへ。あほらしいし、何とだるい登りだったことか。

二日ぶりに戻ってみると、ルート工作も荷上げも遅々として進んでいなかった。雪のせいで。十二日になって、C1から全員が下山



C2への荷上げ、見上げるとチョ・オユー頂上が迫る。6400 m

## 寄稿

し、作戦の練り直しをした。アタックは二十日に延期された。翌十三日からは好天が続いた。ネパール暦では十四日がモンsoon明け。まさに、暦通りだった。

十三日。第一次アタック隊がBCを出発。高橋氏も同行することになった。十五日、二人はC2から上部へルート作業を始める。BCから望遠レンズを通してはつきり見えた。

翌十六日。やっとC1に余裕ができたので、上へあがることになった。テレビチームとともに、C3用のテントを臨時に張って泊る。

高橋氏は、C1でまだうろうろしていた。今回は足首を痛めた直後だった上に、体調もすぐれず、慎重に高度順化をしていたのだ。夜。遠くの山際が、パツと明るくなる。雷に似た放電現象らしい。星空がきれいだ。

十七日。第二次アタック隊、荷上げ隊とともに上へ出発。こちらは、登ってくる隊員の写真を撮らねばならないので一足先にテントを出る。四〇―四五度の雪面。アイゼンがよくきく。二百メートルほど登った尾根上で待つ。チョー・ウイなどの眺めが素晴らしい。ここから、中国隊報告書が「複雑地形帯」と呼ぶアツプ、ダウンのきつい稜線を登る。私とTVカメラマンは、上へ泊まれないので途中の写真を撮って引きかえす。六四〇〇メートルの鞍部で、望遠による撮影。無風であたたかい。雪のない岩の上を選んで、日なたばっこを楽しむ。

十八日、BCへ下山。十九日、企画ものなど原稿の準備。そして、第一次アタックの二十日朝を迎えた。

明るくなった午前八時（北京とは二時間ほど実際の時差がある）、C3上部のクローアールを登る二人が見えた。望遠レンズで動きをじっと追う。かなりのスピードだ。午前九時、中国、ネパール両方の山が見える稜線に着く。早川からは、ゴホゴホというせきと、ゼーゼーという荒い息の合間に「あと一時間ほどで

着きそうです」との無線が入った。だが、頂上はまだ遠い。チヨ・オユ一の頂上はグラウンドが何面もとれるほど平らで広いが、この手前は、四〇度ほどの登りだ。一步踏みだすのに、五回ほど大きく息をついている。十一時「頂上はどっちか教えてくれ。右も左も同じでどこが高いか見えない」と無線。こちらからも、影になっているが「右だ」と指示。

BCには、私とTVカメラマン、それに体調の悪いシエルパとコックの二人しかいない。午後零時十五分、頂上へ。「チヨモランマも、ローツェも見える」と無線。「おめでと〜」「二次アタックもがんばれ」と、いっぺんに無線がにぎやかになった。C1で、C2からC3への途中で、みんな、やりとりを必死に聞いていた。

二十一日。今度は二次アタック。高橋氏が頂上から飛ぶ日だ。未明は雪。朝も山は霧の中。ところが、八時を過ぎて、急に晴れてきた。

高橋さんが頂上はおろか、頂上付近から飛ぶことについて、実は今井隊長を含め、隊員の誰も信じていなかった。けがをしていた

こともある。が、何より難しすぎる、というのが理由だった。が、それだからこそ、高橋さんには心中期するところがあつた。

シエルパと二人、青いパイプシートや吹き流しを背負い、着陸場所作りに出発。BC周辺は岩だらけで危険なので、氷河の向うの雪原に着陸する予定だ。三十分がかりで氷河を突き抜け、平らな雪の上に着く。

十時十五分、頂上着。かなりたつて「飛ぶぞ」と連絡が入った。じつと頂上に目をこらす。風に吹かれた氷のつぶが、キラキラ輝きながら流れていく。待つこと一時間余り。「フ

ライング」と横にいたシエルパが叫んだ。朱色の鮮やかなパラグライダーが頂上の上に浮いていた。「時速五〇キロ以上」とあとで高橋

さんは言っていた。雲を切って、ぐんぐん近づいてくる。赤のワンピース姿の高橋さんがはっきり見える。横風にあおられながらも、うまく翼を旋回させて無事着地。「やった」と抱きあって喜ぶ。トランシーバーで「ミチコ、頂上から飛びました。無事着地しました。」

ワンピースのすそは、アイゼンでひっかけ破れ、手袋は片方ずつ違うのをはめていた。

全然気付かなかったという。何せ四回失敗し五回目に成功した。

やや傾斜のついたネパール側に、十メートルほど雪を踏み固めてコースを作った。隊員、シエルパに、長さ十メートルの翼を広げて持つてもらい、風をはらませ、走り出す。だが空気が薄くて浮力が弱いのと、動きがままならぬので、転んだり、翼がしぼんだり、うまくいかなかったそう。

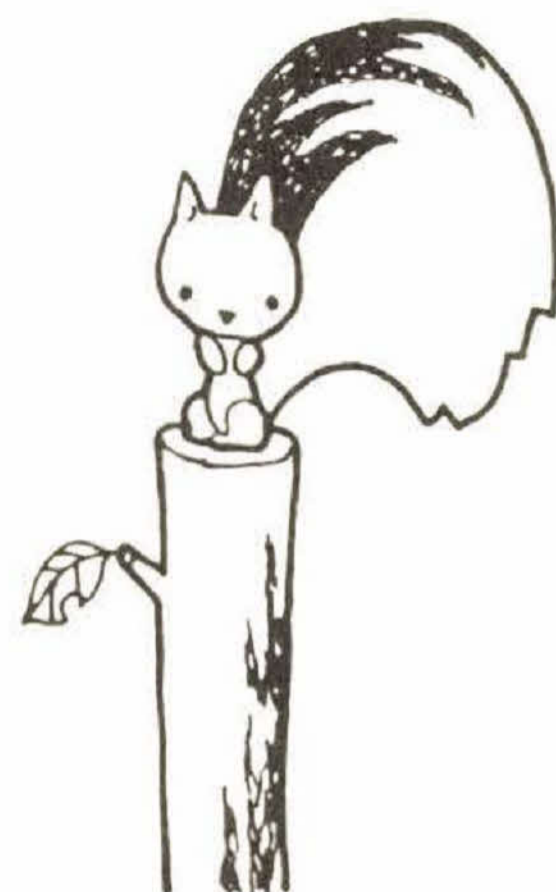
だが、上からみた氷河の眺めは格別だったらしい。

BCへ帰るのも、高橋さんは辛そうだった。約十分間で、高度にして二五〇〇メートルも降りた。体に悪いはずで、二、三日手足がしびれたという。

私は、インタビューをすませ下山。TBCで翌日、今井さんが頂上へ立ち、全員登頂したと確認するや、パジェロで出発した。リングをかじり、運転手に目薬をさし、走りに行った。二日目の昼にラサ着。やっと通じた国際電話で成功を報告。

天皇が手術した翌日だった。残念ながら、山の記事は扱いが小さかった。

## 会務報告



### 昭和六十三年 針葉樹会 新年会

去る一月二十八日、如水会館武蔵野の間にて、針葉樹会新年会が開催された。多くの諸先輩方の出席を得、本年も盛況であった。席上、石井会長による西牟田代表幹事代行の紹介・先頃ヒマラヤ周辺のスケッチ行より帰国した中村氏（二十八卒）の報告・長年に亘り収集・編纂された金子氏（四十六卒）のスライド映写（残念ながら、楽しみにしていた当人は、海外出張の帰国が間に合わず当会に出席出来なかった）の後、吉沢一郎大先輩をはじめとする大先輩諸氏よりの心引締まる言葉の数々を戴き、九時過ぎ閉会。

### 出席者（敬称略）

吉沢（3）松木（3）近藤（4）増山（8）  
黒田（11）柿原（12）望月（13）佐々木（14）  
佐野（16）宮城（16）久保（17）根本（17）  
佐藤（17）小林（19）樋口（22）石井（23）  
山崎（23）田中（23）笠原（24）望月（25）  
中村（28）石原（30）高崎（31）佐藤（31）  
山本（32）山田（34）渡辺（35）中島（36）  
石（36）竹中（39）名和（特）西牟田（47）  
佐藤（53）引地（55）岡部（55）



## 会務連絡

代表幹事会務臨時代行についてのお知らせ

宮武幸久代表幹事の人事異動にともない、西牟田伸一氏（昭和四十七年卒）が総会までの期間臨時に会務を代行いたしております。何卒ご了承のうえ、ご協力方お願い申し上げます。

## 編集後記



今年の正月は記録的な暖冬のため、あまり冬山らしい冬山とならず、残念に思われた方、また喜ばれた方がいらっしやうと思われます。しかし、立春を過ぎてから、冬型の天候が続き、ようやく冬らしくなりました。皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

カルガリーオリンピックが終わりました。日本選手の活躍が印象に残っています。連日のTV中継の時、カナディアンロッキーの山並にどうしても目をとられます。そこを登る姿を想像し、ルートを目でさがしている自分を発見します。このくせは直りそうもありません。

